

原 著

「日本財団在宅看護センター」起業家育成事業受講生の 受講決定の要因と受講後の意識調査

An investigation of factor of the attendance decision and consciousness
after the attendance; Nippon foundation home health care center's the
entrepreneur upbringing business students.

石川 徳子* 入澤 亜希**

Tokuko ISHIKAWA, Aki IRISAWA

(*神奈川歯科大学短期大学部 看護学科 **一般社団法人 葵の空訪問看護ステーション 代表理事)

キーワード：日本財団在宅看護センター 起業 在宅看護 意識

I. はじめに

わが国は、今、人類が未だ経験したことのない高齢社会を迎えている。しかも、高齢化とともに少子化も、世界で例をみない深刻な状況にある。政府は、いわゆる団塊の世代が、いわゆる後期高齢者75歳に達する2025年対策を工夫しているが、実際には社会の変化に追いついていない感もある。

わが国の高齢化は、その後も上昇を続け、2060年頃には高齢化率39.9%に達し、国民2.5人に一人は65歳以上という超高齢社会にいたると予測される。高齢者が増えることは、単に病者が増えることだけではなく、いわゆるADL (Activities of Daily Living) の低下した人口が増えることを意味する。2025年には、現役世代4人が一人の後期高齢者をささえねばならないとされるが、現在同様の少子化傾向であれば、2060年頃には、現役世代1.3人が一人の後期高齢者を支えねばならない事態が生じることになる¹⁾。

現在、さし当たっての2025年問題の対策として進められているのが地域包括ケアシステムである。これは、

- ① 団塊の世代が75歳以上となる2025年を目途に、重度な要介護状態となっても住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるよう、住まい・医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供されるシステムを構築する、
- ② 認知症高齢者の生活を地域で支えるシステムを構築する、
- ③ 高齢化の進展状況には地域差が生じるため、保険者

である市町村や都道府県が、地域の自主性や主体性に基づき、地域の特性を作り上げる、包括的なシステムといえる²⁾。

また、2014年6月18日には、地域における医療及び介護の総合的な確保を推進するための関係法律の整備等に関する法律案（以下、医療介護総合確保推進法）を参議院本会議で可決した³⁾。

これら、政府が地域全体で医療や介護に取り組む方法が模索されている中、公益財団法人日本財団（以下、日本財団）は、公益財団法人笹川記念保健協力財団（以下、笹川財団）とともに、看護師を中心とする新たな地域の保健医療の拠点となりうる「日本財団在宅看護センター」を起業し、運営する看護師の育成事業を開始した。骨子はこれからの日本の地域社会の健康を支える鍵は、キュア (cure 治療) よりケア (care 看護・介護) に力を発揮できる看護師による、多職種協調を基本とする体制との考えである⁴⁾。

本調査は、勝原ら⁵⁾が「起業看護師の育成に関する研究」で、一般看護師とスペシャリスト（専門看護師・認定看護師・認定看護管理者）を対象に起業についての質問紙調査をした結果を踏まえ、研修生自らの意思を確認する意味と、以後の研修内容の充実への提言をも意図して行った。

看護師の起業を目指した「日本財団在宅看護センター」育成事業の1期生に17名が決定し、14名が仕事を退職して受講中した。起業コースの研修は多々あるが、勝原の研究同様、個人がこのコースを選択した意思や受講後の意識の変化には、それぞれ意味があり、それを明らかにする事が、次年度以降のカリキュラム構成や講師選定等

受付日 2015年11月30日

受理 2016年1月28日

に役立つと考える。そこで、受講生6名が、研修の責任者である笹川財団理事長とも意見交換の上、本調査に取り組んだ。

研修内容

日本財団在宅看護センター起業家育成事業は、開発途上国のプライマリー・ヘルスケア分野での活動と、わが国での大学看護教育経験から、高齢化と過疎化の並存する日本と地域保健のあり方と検討してきた笹川財団理事長の原案を基に具体化され、本研修事業は、前後期各2ヵ月の講義と3ヵ月の実習を含む全8ヵ月の集中強化研修であり、両財団は、研修修了生の可及的速やかな開業と、数年後の地域での研修を加え、5年以内に、全国に約200ヵ所の「日本財団在宅看護センター」網を張り巡らし、地域保健医療の充実を図りたいとの構想をもっている。

II. 研究目的

地域を拠点とする「日本財団在宅看護センター」の開設と普及のため、その趣旨を理解し受講を決めた受講生 の意思決定と受講後の意識を明らかにする。

【用語の定義】

意思とは：物事を成し遂げようとする志

意識とは：認識する心の動き

III. 研究方法

本研究デザインは質的内容分析の手法を用いた。

1. 調査対象

2014年度「日本財団在宅看護センター」起業家育成事業の受講生17名とした。

2. 調査方法

1) 調査票

研修の責任者である笹川財団理事長と研究メンバーである受講生6名が、受講前の面接内容をベースに調査票を作成した。調査票には、受講生の属性、研修参加動機、在宅看護や起業を目指した時期について記載し、前期2ヶ月の講義終了後に調査票と回収用封筒を配布し、回収時は封をしてもらい回収袋に入れてもらった。

2) グループインタビュー

グループインタビュー内容：①起業に対する不安、②起業のカリキュラム（講義）について、③17名お互いの影響

インタビュー内容は事前に同意を得て、ICレコーダーに録音した。研究メンバー6名はインタビュアーの役割で動き、11名の受講生を1つのグループとして実施した。研修の限られた時間内でインタビューを行うため、神戸

への宿泊研修時に会議室をレンタルし実施した。

3. 調査時期

1) グループインタビュー

2014年7月14日、約80分

2) 調査票

2014年9月1日～9月19日

4. データ分析方法

1) グループインタビュー

分析方法は、受講生にグループインタビューした音声データを逐語録に起こし、繰り返し読み意味内容の類似性によって分類し、カテゴリー化を行った。カテゴリー化した内容のリストを作成し、類似性に着目して分類した。分析は研究メンバー間で合意を得るまで繰り返し、信頼性・妥当性を確認した。

2) 調査票

単純集計を実施した。

IV. 倫理上の配慮

受講生に対して、研究の趣旨、匿名性の保持、参加の自由、途中辞退の保障などを口頭で説明し、署名にて研究参加の同意を得た。

V. 結果

1. 調査票

受講生17名中研究協力者は16名、回答率94.1%であった。対象となった受講生の概要を表1に示した。

研究協力者である受講生16名中、11名（約70%）は訪問看護の経験があった。看護師経験年数の平均は21.3年、訪問看護経験年数の平均は5.7年、在宅看護を意図した時期は看護師になって12.5年目、平均年齢は37.4歳であった。さらに、起業を意図した時期は看護師になって18.1年目、平均年齢は43.7歳で、研修受講は在宅看護を意図した時期から約6年経過していた。表1に記載していないが、すでに起業している受講生が男性1名、女性1名いた。

受講を決めた意志決定である研修参加動機、研修参加への支障、受講理由を以下に示した。

研修参加のきっかけを表2-1に示した。14名が紹介、もしくはちらしを見て受講を決めていた。

研修参加への支障を表2-2に示した。支障の内容には、退職・金銭面・家族・転居等があげられていた。

受講理由を表2-3と2-4に示した。受講理由には、看護師の自律・自立や起業が多かった。受講理由の自由記載には、全職場の方針と自己の看護の違い・研修内容に関するもの・ライフワーク・経済的支援等があげられていた。

表1 受講生の属性

N=16

<特性>	<カテゴリー>	<人数> (%)
年代	40歳以下	4人 (25.0)
	41～50歳	5人 (31.2)
	51歳以上	7人 (43.8)
性別	男性	2人 (12.5)
	女性	14人 (87.5)
訪問看護経験	あり	11人 (68.8)
	なし	5人 (31.2)
居住地と起業地 (県・区・市の変更)	変更あり	7人 (43.8)
	変更なし	9人 (56.2)
<看護経験年数>	<年数>	<平均>
看護師経験年数	9～33年	21.3年
訪問看護師経験年数	2ヶ月～10年	5.7年
<在宅看護や起業を目指した時期・年齢>	<年数・年齢>	<平均>
在宅看護を目指した時期	2～32年目	12.5年目
年齢	22～57歳	37.4歳
起業を目指した時期	3～33年目	18.1年目
年齢	28～58歳	43.7歳

表2-1 研修参加のきっかけ

紹介	7
ちらし	7
その他	2

表2-2 研修参加への支障

退職すること	<ul style="list-style-type: none"> ・仕事を辞めること。 ・職場から退職を認めてもらうまでに時間を要した。 ・退職できなかった。急だったため自分の次のポストが人材不足で迷惑をかけた。 ・前職場で新部署を立ち上げ後2年しか経過しておらず、新管理者をたてるか、部署存続をどうするかの問題を生じ、職場に迷惑をかけた。
金銭面のこと	<ul style="list-style-type: none"> ・離職して参加しなければならず、世帯の収入が絶えることで、研修期間中の生活費、子供の養育費など経済的なことが支障。 ・年齢・経験・収入がなくなること。起業が早まることで資金の準備不足。 ・前職を辞めることで収入が得られない。 ・生活費のこと
家族のこと	<ul style="list-style-type: none"> ・夫の反対。今は納得させた。 ・独居の母親がかなり不安がって心因反応（胃痛その他）が出現した。 ・子供の世話、自宅が不在になる。
転居すること	<ul style="list-style-type: none"> ・研修地が東京なので転居することになった。
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・現継続中の事業のこと。 ・現職場での責任者がいなくなることによる混乱が起きるのではないかと危惧

表 2-3 受講理由（複数回答）

看護師の自律・自立や起業	講義・実習プログラム	各種支援制度	社会のニーズ	在宅看護の実施	身近な人の看護や看取り体験	前職場の方針と自己の看護観の違い	前職場の収入や立場（職位）に不満
13	9	7	6	2	6	7	2

表 2-4 受講理由（自由記載）

前職場の方針と自己の看護観の違い	<ul style="list-style-type: none"> ・看護に対する自分の考えや思いと職場の理念に少しずつズレが生じてきた。 ・決められた枠の中で、良い看護をと思っても勝手な動きと制限された。 ・自分の考えている捉え方が正しい方向に向いているか確認したかった。 ・契約書や指示書等の書類の不備、看護上の安全管理に関わることも改善されない等、看護に対する当たり前の姿勢に差がありすぎた。利用者に「質をそろえてくれ」と言われたことがきっかけ。看護の教育は看護師しかできない。上司が医師では、待遇上主体性のないだまる看護師が重用される。
研修内容	<ul style="list-style-type: none"> ・経営学など独学でと考えていたが、この研修内容が一通りの必要なことを学べる機会だと思った。 ・講師陣への信頼
ライフワーク	<ul style="list-style-type: none"> ・定年後の仕事のこと、自分の生き方のことを考えて。
経済的支援	<ul style="list-style-type: none"> ・研修期間中の生活費や交通費、起業するにあたって経済的支援があるので、この間無収入でもやれると思った。

在宅看護を目指した理由を表3に示した。在宅看護を目指した理由には、医療中心の病院看護への疑問や葛藤・家族の在宅看取り経験・在宅看護の必要性和魅力を実感・目指す起業形態の実現・ワークライフバランスに適した在宅看護・多死社会を迎えるにあたり在宅看護の担う役割・在宅看護の支援等があげられていた。

財団の研修を選んだ理由を表4に示した

2. グループインタビュー

受講を決めた受講生の意思決定と受講後の意識を以下に示す。1) 起業に対する不安、2) 講義に対する意見、3) 17名お互いの影響について、カテゴリーを【 】、受講生の語りを「斜字」で示した。

1) 起業に対する不安

【起業資金確保の不安】、【経営者としての重責】、【みえないものに対する恐怖】、【地域連携への不安】の4つのカテゴリーが抽出された。

【起業資金確保の不安】には、人件費・事業開拓資金・助成金の確保への不安があった。

人件費に関しては、「お金のそのことを心配なのは、やっぱり一緒に働いてくれる、一緒にやっていきたいと

思ってくれる人たちの、その人生を背負わなきゃいけないのかなっていうところが一番のプレッシャー。今までは誰かに雇われて、頼っていたところを自分が全部請け負っていかないといけないっていうことが一番不安、「仕事が入ってくるまでに、お金が持つのかなという。だからまあ、仕事がコンスタントに入ってくるのがいつなのかなって言うのがちょっとあるので。お金がそこまで、人件費が持つのかなっていうのが一番のあれですね」と、事業をしていくには人件費が大きなウエイトを占めると考えていた。

事業開拓資金に関しては、「人とお金と、それからものの部分。何をどのくらいそろえたらいいのだろうかというようなところがあるんですけど…」、「事業所もっているんですけども、次にプラスアルファする時にどういったかたちがいいのかなって言うのが、だいぶ煮詰まりつつあるんですけども、それによって今も人材がどんどん入ってきてるんですけども、だから、早く進めていくことが必要なんだと思うんだけど、やっぱりマネーかな。お金ですよ」と、自己資金と運転資金をどのようにしたら良いのか見当がつかないでいた。

助成金に関しては、「自分の持っているお金だけで

表3 在宅看護を目指した理由

医療中心の病院看護への疑問や葛藤	<ul style="list-style-type: none"> ・病院は、治療の場ではあるが、あまりにも治療に限定されず、治療終了後の患者が安心して療養できる環境はない。 ・病棟では医師の指示、治療の介助のみにおわれ、患者さんに寄り添う時間がなくジレンマがあった ・病院でどうしても医療が主体の看取りや終末期ケアのあり方に疑問を持ち、本来の自然な看取りができるのは、やはり家ではないかと考えたため。病院でどうしても医療が主体の看取りや終末期ケアのあり方に疑問を持ち、本来の自然な看取りができるのは、やはり家ではないかと考えたため。
家族の在宅看取り経験	<ul style="list-style-type: none"> ・近い親戚が末期がんで半年という余命を伝えられ、自宅で過ごすことを選択した。亡くなった時の様子は、今まで病院で看取った患者さんとは全く違い、自宅という選択肢があるのだと知った。将来、私も在宅を支えるナースになりたいと思っていたが、昨年、祖母を自宅で看取りその思いが強くなった。
在宅看護の必要性和魅力を実感	<ul style="list-style-type: none"> ・看護大学に編入した時、在宅看護論実習を体験した。それまで病院しか知らなかったの、在宅看護を目の当たりにしカルチャーショックを受けた。生活の大切さ、その人らしさをそこで感じた。それ以降在宅看護の道を選択した。 ・患者さんの望む過ごし方ができる場所は自宅なんだということを実感したから。自宅で看護が必要な人の為に働きたいと思ったから。
目指す起業形態の実現	<ul style="list-style-type: none"> ・ホームホスピスを起業したいと考えた。県内にこれを成功させているロールモデルがあり見学に行き「これだ！」と思えた。病気のために不安で夜も怖い人たちのそばにいつも寄り添える環境で穏やかに「いい人生だった」と最期は思っ旅立ってもらいたい。私もそのように逝きたいと考えたからこの形態で起業する。
ワークライフバランス(以下WLBと略す)に適した在宅看護	<ul style="list-style-type: none"> ・臨床を離れ家事と育児に専念していたが6年目に県看護協会が訪問看護養成講座を始めたため受講した。子育て中の自分にとってWLBに適していた為受講後そのまま訪看立ち上げに入った。
多死社会を迎えるにあたり在宅看護の担う役割	<ul style="list-style-type: none"> ・看護師自ら地域で活躍している場所であり、実際仕事で地域の高齢者と接している際、看取りからお墓までみていく必要を感じた。独居高齢者、家族関係の希薄からも心身が弱った状態では看護師の力、役割が必要になってくると感じたため。
在宅看護の支援	<ul style="list-style-type: none"> ・連携や受け入れ側のステーションも「がん末期は看れない」と断られることがあったり、受けて頂けるステーションの負担や疲弊している現状もかいま見れたため、在宅連携に関する問題を感じていた。

ていうのをすごく莫大なお金かかるかっていうの難しいと思うのね。財団からの、助成金っていうのもあてにしている部分があると思うんだけど、実際に出るのかどうかという不安はないですか、「ただのものほど怖いものないし、株式不動産に投資するわけではないですよ。やっぱりした分、寄付はこんだけというふうな、はっきり明確に言えば、ああ、そうなんだということで、なんですけどね。そこをたぶんみんな曖昧のところ」と、助成についての捉え方が個々に異なっていた。

【経営者としての重責】には、経営者として事業展開する上で、人材雇用・開業場所への不安があった。

人材雇用に関しては、「人材が集まるかっていうことです。取りあえず、訪問看護ステーションというのは2.5人いるわけだし、実際のところ、今現在、その2.5人の

うちの自分の一人だけしか、はっきりしてませんので。そここのところがすごく心配」、「人がそれだけいい人が来てくれれば、ケアが受け入れられて、軌道に乗るんでしょうけれども、そこが出はいいり、出はいいりでしたら続かないから、人のところ。人が定着するためには、事業所内のハードの面、ソフトの面、えーと、環境整備していかなくちゃいけないので、本当に全体的に不安がある」と、理想の人材を確保し継続性を維持できるかを考えていた。

開業場所に関しては、「場所の問題です。都内という、すごく限られた地域の中で、地方だとね、そういう空き家があるかっていうのありますけど、都内だとそこはなかなか難しいところなので、そういう場所の確保ができるかどうか不安」、「訪問看護ステーションを雇われてやっていたので、どこに開こうかなっていう場所の、と

表4 財団の研修を選んだ理由

- ・漠然と在宅看護や地域看護をしたいと考えたが、何から何を勉強し準備すれば良いかわからなかったので、起業やマネジメントについて学びたいと思った。
- ・ひととおり起業・経営に必要なことを学べるビックチャンスだと思ったから。他の経営学では医療のことを含めた内容のものは無かったから。
- ・カリキュラムが専門職大学院に近いものがあると感じた。ここまで、講義が充実していること。
- ・自ら開業することを考えてはいたが、金銭的管理や人の管理に対する知識がなく、どこかで、ぜひ身につけたいと思っていた。また、働きながら、自分に不足している知識の勉強を続けてきたが、系統立てて学びたいと思っていた。講義概要の学習事項を見て、まさに自分が学びたい内容だと思った。
- ・起業するのに必要なことを体系的に学べるのではなかと考えたから。
- ・お金の計算や経理面の不得意な面も学べると考えたから。
- ・経営+コーディネート力+国政など本物の方より学ぶため。
- ・講師の先生型がその道のトップレベルのかたばかりで、これを逃したら2度と聴くチャンスはないと思った。
- ・事業計画の作成まで研修期間中に行うことになっていたので起業について具体的に考え実行できるのではなかと考えたから。
- ・起業前の準備期間として8ヶ月とれる（心の準備期間）。
- ・起業したいと思いながら何から始めたらいいかわからなかった時に「在宅看護センター起業家育成事業」という文言が求めているものと合致しました。
- ・活躍できる場所づくりとして日本財団が考える在宅看護センター（構想との方向性）が合致していると考えたため。
- ・看護の地位向上の為団体でできると国を動かせると思った。看護に対する手厚い報酬と社会保障費の削減。
- ・「看護師が社会を変える」というキャッチコピーにも惹かれた。
- ・日本財団のマークが入った車両に乗って訪問看護に従事しておりました。医療・福祉の分野で大きな貢献をされている財団であると認識していたし、起業した時に私には何も実績が無いので、日本財団の研修を受けたということが自らの誇りになり、周囲の人から信頼を得る根拠になると思いました。
- ・日本財団という大きな組織への信用もあった。
- ・以前から日本財団の在宅ホスピス研修などに関心を持っていました。施設を辞めて何の肩書きもない自分にとって後援に大きな財団があれば自分のやりたいことに活かせるのではないかと考えたため。
- ・長期研修につき金銭面への不安も大きかったが生活費の助成制度もあったから。
- ・研修の受講費用が払える範囲内であり、研修終了後に補助制度があったから。

ころで、ちょっと決められないでいるっていうこと」と迷いがみられていた。

【みえないものに対する恐怖】には、事業の方向性と構想のずれという不安があった。

事業の方向性に関しては、「経営のこととか、マネジメントのこととか、勉強すればするほど自分の知識の無さがどんどん明るみになってきて、こんだけでいけるのかなっていう準備が足りるかなっていう不安がすごいある」、「最初から考えている青空写真をいかにどのように具体的にやっていけるのかっていう内容が全く実践がないので、見えてないので、そこのところをどう固めていくか、いけるのかっていうのがとっても不安。特にまずは形の内容を濃くすることがどうすればいいのかがとても不安」と漠然とした捉えどころのなさから不安を感じ

ていた。

構想のずれに関しては、「一番やりたいと思って、今回起業へ導引したものと、実は私、今まで予防的観点とあってあんまり勉強もしてなかった。今回財団の理念としては、その予防のところからっていうところで、なんか少し混乱している自分がいて」、「やっぱりスタートでイメージしてたものと、話を聞いていく中でちょっとイメージして見えていくものが、少しずつなんか自分が思っていたところもあるかなって。それがこう、見えないでやりたいことに対して、自分にとって都合がいい情報だけで、これはできるかもって思ってたのが、そうじゃない部分もあるというのが出てきているというのは、自分の中で。それは勝手な自分の思い込みだけかもしれんですけど、そこがちょっとあったりして不安」と現実と理想のギャップの中で試行錯誤がみられた。

表5 グループインタビューの結果

インタビューのテーマ	カテゴリー	サブカテゴリー	コード
起業に対する不安	起業資金確保の不安	開業準備・運転資金・助成金の確保に対する不安	事業展開していくには人件費が大きなウエイトを占める
			自己資金と運転資金をどうしたらよいか見当がつかない
	経営者としての重責	経営者としての事業展開における人材・開業場所・時期への不安	助成金についても捉え方が個々に異なる
			事業展開していく準備と負うべき責任への不安 如何に理想の人材を確保し、継続性を維持できるか、環境も整っていないとてはならない スタッフのモチベーションを維持するには、自分自身が経営者として確立されなくてはならない
見えないものに対する恐怖	設立までの理想と現実のギャップの具体的なイメージへの不安	漠然とした捉えどころのないものへの不安 起業するまでの過程での試行錯誤	
地域連携への不安	日本財団在宅看護センターの地域での認知に対する不安	プロジェクトを継続するためには地域に認められ、根付いていくことが必要であるが、その方法がわからない	
起業のカリキュラム（講義）について	満足な講義	刺激的な講義構成で起業に即した講義内容	アトラダムな講義構成は刺激的で飽きがこなくて面白い 何をしたら良いかという不安が消えていき、安心していける講義構成になっている 起業を目指す看護師へのメッセージを込めた講義内容である
	講義企画者への感謝	錚々たる講師陣と講義準備を頂けたことに感謝	理事長の人徳で凄い講師陣のラインナップに感謝 小人数に錚々たる講師陣から直接学べる貴重な機会 本研修を企画・運営して下さる財団スタッフの苦勞と配慮
学習意欲の高まり	講義の全体像が見えない不安	さらなる深化や学習意欲の高まり	研修に参加し学習意欲が高まった
			講義内容をリンクさせ、さらに学びを深めたい
			講義や実習の全体像が把握できるシラバスや要綱を希望
後期の講義への要望	事業計画や起業の実践に必要な講義や討議の時間を希望	講義内容や時間配分に関する意見	思考の整理がしやすい講義スケジュールの調整を希望
			事業計画や実践に活かせる講義
			実際に必要な起業準備方法の講義が必要 研修生でディスカッションや自発的活動ができる時間がほしい
17名お互いの影響	刺激し合える仲間	お互いの影響・刺激・個性がプラスになっている面	凄く刺激になっており、影響を受けている
			それぞれの色が面白い ディスカッションが楽しい 指摘を受け自分を見つめ直す機会になっている 他県の事情や地域性を知ること視野が広がる
	距離を置く仲間関係	お互いの影響がマイナスになっている面	経験の違いからくるストレス
			影響がありすぎて疲れる 仲間に対して距離を置く
起業への決意	お互いに補完し合い良いものを作りあげ起業したい	同じ志を持っている仲間	
		起業を達成したい 起業への決意 他者の経験されてきたことや特化した技術を吸収し活用したい	
不安を解消する秘訣	新しいことへのチャレンジへの不安を乗り越え支え合う	不安も表出できる仲間である 新しいことに対する不安を共有理解し、アドバイスしてくれる先輩者の仲間の影響	
安心できる財団のサポート体制	日本財団の研修を受けられていることが誇りであり精神的支柱(安心)		単なる起業研修とは違う
			看護と起業のコラボレーション
			財団が後盾

【地域連携への不安】に関しては、在宅看護センターが地域・市町村・ケアマネジャー・医師会・看護師に受け入れられるかという不安があった。「地域の人たちに私の在宅看護センターが受け入れていただけるかどうかどちらかというと、在宅よりは病院志向な方が多い地域なので、私が考えてるのは、やっぱり在宅で家族が主体で見ていただけるような援助を考えているので、本当にそれを地域に分かってもらえるアピールをもっとしていきたい」、「起業プランをより詰めていく上でその考え方がないというか、そこを詰めるんかなっていう、そこにやっぱりお金出してもらったりとか、市町村だったりとかから出してもらったりとか、そこに人が、食い付いてくれるような、つくれるかなっていう不安はすごくあります」、「訪問看護でいったときに、ヘルパーとどこが違うねんって。必ずこう比較されるんですよ、この二つはね。」、「医師会の先生はややこしいですよ。医師会は動けないです。動かない。医師会は医師会の訪看があるので。」、「看護師が何ができるのかってということさえも、たぶん、看護師も説明できないし、ケアマネも分かってない。だって、私たちだって、看護師って何ができるんって言われたときに、説明できないでしょう」と、事業を継続するためには地域に認められ、根付いていく事が必要であると考えていた。しかし、どのように関わればいいのかわからないでいた。

2) 起業のカリキュラム（講義）について

【満足な講義】、【講義企画者への感謝】、【学習意欲の高まり】、【講義の全体像が見えない不安】、【後期の講義への要望】の5つのカテゴリが抽出された。

【満足な講義】に関しては、刺激的で新鮮な講義構成に対する満足感があった。「とにかく、あの、講師陣の先生方の、すごい先生たちが、もうずっとそろっていらっしゃるし、確かに、ランダムはランダムなんですけど、どう来られてもランダムかなって、私にとったら。そういう気持ちになれるのはいですし、ただ、私、ものすごく恵まれてるなって思ってて、それについては幸せ感っていうかですね、すごいでしょうみたいな、田舎に生きてるおかげというか、すごいでしょう、こんなだよみたいなことを、もう言ったりとかしてるんで。ほんと、幸せ者なんだなって思うんですけど」、「いろんなのがアトラダムに入ってくると非常に飽きが出来なくて、私は面白いです」

また、講義内容が起業目的に即して満足感が得られていた。「内容がやっぱり違って、起業家を目指してる看護師だからっていうメッセージがいっぱいあるんだって思って、そういう意味で、やっぱりこの講習で、聞く話はまた新鮮に思えてすごく、面白かったです。やっぱり、ちゃんと対象者っていうことを考えて、先生方、考

えておられるんだなとか思って」と、起業を目指し集まった受講生は、講義へのニーズが満たされていた。

【講義企画者への感謝】に関しては、財団の担当者が準備した錚々たる講師陣とその企画や運営に対して、感謝の気持ちがあった。「先生の人徳でそんなにすごい先生がやってきて、自分がそれなりにかじってきたことを深く、説明してくれる先生とかが現れて、やっぱりお金あるとか、人徳があるって、すごいことなんだなっていうのを、認定の学校行っているいろんな人が来たんですけど、やっぱりそのラインナップが学校によって全然違うので、それはやっぱり先生のおかげだなというのを思ってた」、「これ一人でやろうと思ったら、こう、すごく難しいし、何年もかかることを、これだけ集中してやってただけでっていうことで、すごくありがたいし、本当にいらっしゃる先生方も、すごい先生ばかり来てるので、本当にありがたい、楽しくさせてもらってるんです」と、他では受講できない講義内容に感謝と尊敬の念を抱いていた。

【学習意欲の高まり】に関しては、向学心や学習意欲の高まりを感じていた。「私これから、まだ勉強したいなって、これが終わってもまだ勉強したいなっていうふうに思っちゃうくらいなので」、「自分の中で、この講義、こないだの内容となんかリンクする部分あるなと思ったら、そこをつなげていって、もうちょっとここ深めなあかんねやとか思ったりとか、自分で考えていけるんで、それはこれで、まあ、もう少し深くいってほしいときもありますけど、ほんまやったら自分で全部しなあかんかったことをこんだけ教えてもらってるんで、そのきっかけというか、教えてもらってるだけでも十分かなと思ってます」と、自ら学ぶ姿勢が感じられた。

【講義の全体像が見えない不安】に関しては、思考の整理がしやすい講義スケジュールの調整を希望していた。「概論と各論と財務と、医療ものと介護ものと、あの整理されて、いければ、もうちょっと楽と思うんですけど。あの、すごく感動したあとで、すごくビビったり」

また、講義や実習の全体像が把握できるシラバスや要綱を希望していた。「全体像が本当に分からないから、あちこち飛ぶから、あの、例えばそのお金の話はもうこれ終わりのかなと思うと、なんかその、不消化で、確かに貸借対照表は分かったけど、あれを自分で事業計画書の中にああいうのをつくっていかなくやいけないっていうときに、実際にどういうふうにつくっていくかまで、なんか、そこまでやってほしいな」、「実習要綱ですよ。そういうのがね、もう少しね、早めに、早めにお知らせ

をいただいたら、少し自分の今のはやってる気持ちかね、落ち着くんじゃないのか、そう思ったんですね」

さらに、講義内容や時間配分に関する意見があった。「面白くないなって思った先生の講義も、やっぱり当然あって。その先生は、やっぱりメッセージがないというか。もうただ、こういう内容、こういうことやりましたっていう。やってることは素晴らしいんだろうけど、なんか私たちに訴えかけるものってないよなって思うときは、ちょっと冷めた自分がいて」、「DVDとか見るのはちょっと、それは普通に、自分でじゃあ、見といてって言われてもいいかなって思ったんで。本の内容とまったく同じことを言ってるより、講義の先生の経験だったりとか、そういう考えをバツとしゃべってもらおうほうが面白いかなと思うし。退屈なときは、すごい差がありますね」と、8ヶ月間の研修の全体像やその日の講義の具体的内容が形(シラバスや要綱)として示してあると、安心し、さらに効果的な学習ができたと考えていた。

【後期の講義への要望】に関しては、事業計画や実践に活かせる講義(事例展開)を望んでいた。「事業計画つくっていくのには、やはり、そのプランニングで、そんなかでやっぱり、収支っていうの入れなくちゃいけないので、もうちょっとその辺は、案のところでね、もっと厚く、取り入れてほしいなってというのが意見ですよ」、「契約を取って、じゃあ、初回、どういふことをするんですかっていうので、初回ね、事例でって言って、それでは、分かりましたって言って、シュミレーションして、全部書いていって。そういうことが、全部できる。それで、1カ月のレセプトを上げるところまで、それがちゃんと、1人でも2人でも症例つくって、上げていくっていう、その動作をしてあげないと実際に来たときに、たぶん、困ると思うんですね」

また、研修生でディスカッションや自発的活動出来る時間が欲しいと考えていた。「こういう時間って、今日は4時から6時まで空いたから、ぽっと入れられたじゃないですか。そういうふうに、時間割、全部、ぎゅーってなってるから、二時間ぐらい、ちょっとフリーな時間が、たまに空くと、この前みたいな、国会議事堂見学に行けたり、ちょっとさあ、その日本財団在宅看護センターの名前どうする?とか、そういう時間にこういうディスカッションが、その私たちだけで、できる時間とかがある、大人だし、すごいみんな意見を言う人たちばかりだから、面白いていうか、そういう自発的な時間を、ぽつん、ぽつんって」と、病院経験のみの受講生もおり、起業には事業に関する具体的なイメージが必要であると、在宅看護の経験がある受講生は考えていた。さらに、起業計画に関する具体的な講義や自分達を高めるための時間の使い方の希望が出ていた。

3) 17名お互いの影響

【刺激し合える仲間】、【距離を置く仲間関係】、【起業への決意】、【不安を解消する秘訣】、【安心できる財団のサポート体制】の5つのカテゴリーが抽出された。

【刺激し合える仲間】に関しては、お互いの影響・刺激・個性がプラスになっている面があった。「経験されてきたこと、吸収したいなっていうのはあるんですけど。皆さん、それぞれの色が、いろいろ面白くて、影響受けてます」、「ここに集まってらっしゃる方は、ほんとに、いろんな人がいるので。私、前も言ったけども、ほんとに感覚的に、今まで仕事をしてきたので、脳みそがぎゅって絞られちゃうような。ほんとに、もう脳みそどうしようという。そういう授業とかも、みんな、さらってやるから、みんなすごいんだな、なんていうふうに思うし」、「いろんな人たちの経験を聞いたりして、すごく勉強にもなるし、すごく自分のやる気も、持ち上げてもらってるようなところがあって。6月のなんだろう、これだけ、いろんなところから、いろんな地方から集まってくるんで、もっといろんな人の話を聞きたいなと思ってます」と、地域も経験も様々な受講生が集まり、価値観や個性をプラスに捉え吸収し自己を高めたいと思っていた。

【距離を置く仲間関係】に関しては、お互いの影響がマイナスになっている面があった。「もう、たくさん影響されるところがあり過ぎて、これもまた、なんか疲れる原因の一つかなと」、「私も、ほんとにもう、いろんな経験された方の集まりで、自分がここにいていいのかな、なんて思うことも、ときどきあるんですけども」、「目的、同じだからこそ、ぶつかるんだけど、そのところだけ、すごい気を付けてるかなっていう。やばいなと思ったら、距離を置くようには、してきたいとは思っている」と、経験や価値観の違いから疲労やストレスを生じたり、引け目や遠慮を感じる状況があった。また、摩擦や衝突、巻き込まれることへの懸念があり、仲間に対して距離置く関係性が存在していた。

【起業への決意】に関しては、お互いに補完し合い、良いものを作り上げ起業したいと考えていた。「皆さんからいただいているもの、たくさんあるので、私でよければ、力になれることは、なりたいと思うし、お互いにそうやって、補完し合ってやっていかれたら、いいものができるんじゃないかなと思ったんです」、「同じね、志を持ってるじゃない、起業したいっていう、その集まりっていうのは、飽きないですよ。だから、みんながこう会話がわーっと盛り上がる、そのエネルギーってのは、お互いに刺激を受ける、楽しい。誰でもそうなんだけど、やっぱり、達成したいなという」と、第一期生としてお

互いが助け合い、起業という目的を達成したい。また、そのような仲間でありたい続けたいと考えていた。

【不安を解消する秘訣】に関しては、新しいことへのチャレンジへの不安を乗り越え、支え合う気持ちがみられていた。「始まる前は本当に想像がつかなくて、どういうメンバーが集まるんだろうとか、私でいいんだろうとか、すごく、あの、不安ばかりだったんですけど 中略 今のところ、皆さんからいただいているもの、たくさんあるので、私でよければ、力になれることは、なりたいと思うし、お互いにそうやって、補充し合ってやっていかれたら、いいものができるんじゃないかなと思ったんです」、「起業するからには、不安とか恐れとか、あんまり表出しないほうがいい。もう本当に今からでもいいから、ノートに何月何日には、絶対私は、何々訪問看護ステーションを立ち上げて、スタッフがこれだけいて、利用者がこれだけいるっていうのを、何回も、毎日、毎日書いてください。お願いします」、「やっぱり、新しいことって不安なんです。でも、きっと、それを、いくつか乗り越えてきてきた、たぶん、それと一緒にやから、やり出したら、そ不安なんか、やってられへんやろうと思うんでね。ただ、イメージトレーニングって、すごいいいなと思います」と、不安を表出できる仲間であり、新しいことに対する不安を共有理解し、ポジティブに思考を変換し乗り越えられるようにアドバイスしてくれる、先駆者の仲間の影響があった。

【安心できる財団のサポート体制】に関しては、財団の研修を受けられていることが誇りであり、精神的支柱（安心）であると感じていた。「活費の家賃と、40万は、最後までやったら戻ってきますっていうのが、すごい安心でした。自分で全部出していかなあかんっていうんだったら、たぶん、来てないと思います」、「財団の研修を受けたのよっていうのが、バックボーン」、「看護と起業をくっ付けたと。起業だったらありますもん。その起業のやつだけ、行こうと思っても、週末のやつ、一年間だけで、40万じゃ、きかないじゃないですか。むちゃくちゃ安いなって」と、単なる起業研修とは違い、看護と起業がコラボレーションし、財団が受講生の後ろ盾になっていた。そこには、これまでになかった看護師の起業家を育成するプログラムに参加でき、さらに財団からの各種支援体制があり、安心感があった。

VI. 考察

結果について調査票からの「受講決定の要因」とグループインタビューからの「受講後の意識」の2点について考察した。

1. 受講決定の要因

受講生の傾向として、豊富な看護師経験と在宅看護の経験者が、数年後に起業を目指していた。また、在宅看護の経験がない受講生も在宅看護の必要性を感じ、在宅看護の実践を目指し起業を考えていた。

受講決定の要因には、研修に期待する要因とそれを妨げる要因があった。研修に期待する内容として、受講理由の上位にあげられていたものに「看護師の自律・自立や起業」、「講義・実習プログラム」から、今、実践している看護よりも研修を受けることで、自分が考える在宅看護を実践したいと考えていた。受講理由に「前職の方針と自己の看護観の違い」もみられており、自分なりの看護観が築かれ、実践している看護との間にギャップが生じていた。また、研修中に「各種支援制度（受講中の交通費・生活費）」が受けられるため、遠方から参加している受講生にとって、経済的な支援がある事は意志決定に影響していたと考える。さらに、「身近な人の看護や看取り体験」が受講理由になっており、在宅での看護や看取りを意識させていた。

在宅看護を目指した理由には、「医療中心の病院看護への疑問や葛藤」、「在宅看護の必要性と魅力を実感」、「家族の在宅看取り経験」、「多死社会を迎えるに当たり在宅看護が担う役割」等、在宅看護の担う役割や在宅看護の必要性を意識し、看護の専門性の発揮を考えていた。これは、受講の動機にもつながっていたと考える。さらにこの研修の発案者であり、財団の理事長でもある喜多医師が目指すもの⁶⁾と一致していたことが、受講を決めた要因になっていた。また、高齢社会において看護師が地域の健康を生活と医療の両方から支えることが、社会のニーズとも一致する。これとは別に、看護師であると同時に母親でもあり、子育ての時期には自分のWLB（Work Life Balance）と在宅看護が一致していた。

受講を妨げる内容として、受講期間は8ヶ月間あり職場の理解がなければ、今の職場を退職せざるを得ない状況であった。そのため、受講にあたり「退職」という障害がみられていた。同時に「金銭面のこと」、「家族のこと」があげられていた。退職に伴い収入が得られない不安や家族の理解が必要であった。受講や起業には、覚悟や葛藤があったと考える。

財団の研修を選んだ理由には、「起業や経営における専門的な学習」、「財団への信頼」、「支援制度」、「やりがい」等がみられていた。看護における知識や技術はあっても起業については素人であり、財団から起業のための経営知識に関する講義や各種支援体制があることは、受講を決定する大きな要因であったと考える。

2. 受講後の意識

グループインタビューでは、あらかじめ3つのテーマ

を提示し実施した経緯がある。そのため、出てきた内容がそのテーマに沿ったもので抽出された。テーマを決めず自由な発言で進めれば、違った結果が得られたのではないかと考えている。

1) 起業に対する不安

抽出したカテゴリーのうち【起業資金確保の不安】、【経営者としての重責】は、勝原ら⁷⁾の起業へのイメージと類似する。決意や覚悟をして受講したが、起業に不可欠である資金確保や人材確保に対する不安は、受講後も高まりをみせていた。経営者として雇用への責任や開業場所への迷いが重責となっていた。【みえないものに対する恐怖】は、勉強すればするほど自分の知識のなさを実感し、理想と現実の中で葛藤が起こっていたと考える。

【地域連携への不安】は、開業後は地域との連携が必須であり、地域に認めてもらい事業を継続できるか、また、そのための手段をどのようにすれば良いのか等、不安がなくなるという事はなかったと考える。

2) 講義に対する意見

【満足な講義】、【講義企画者への感謝】、【学習意欲の高まり】は、財団が錚々たる講師陣を準備した事が、刺激的で新鮮な講義となり、受講生の満足につながったと考える。その満足感がさらなる学習意欲を呼び起こしたと言っても過言ではない。看護師養成のカリキュラムには、起業や経営に関する講義はない。今回の講義は起業をするため、経営・マネジメントにフォーカスした内容であった事や他の研修では受講できない内容であり、受講生の意欲を高め学習効果へも影響していた。同時に、自ら学ぶ姿勢を確保することは、教育効果として重要である。さらに受講生の満足感、その講義を企画・運営した財団の担当者へ感謝という気持ちに変化したと考える。

【講義の全体像が見えない不安】は、財団は試行錯誤の中、第一期生だということを意識し講師や講義内容を選定していたと考える。全体のシラバスを用意し、概論の後に各論というスケジュールで展開したかったと考える。しかし、講師の都合上、そのようなスケジュールを組み立てにくい状況だった。そのため、受講開始時に全体像が見えない不安につながった。次年度以降は、概論の後に各論をとるスケジュールが無理であっても、講義や実習の全体像がわかるシラバスや要綱があると、不安が解消されると考える。

【後期の講義への要望】は、様々な経験の受講生にとって、起業のイメージも様々である。そのため、起業計画がイメージできるより具体的な講義が望まれたと考える。起業時には請求業務や利用者との契約という病院勤務では経験しない業務がある。それらの業務について受講中に学ばなければ、起業時に困ると予測していた。す

でに起業の経験がある受講生や在宅において管理者経験のある受講生は、自分達の経験から具体的な講義でなければ、起業のイメージはつかないと考えていた。

もう一点、受講生同士がディスカッションできる時間を要望していた。研修では1日90分の講義が3コマあり、空き時間がないことが多かった。しかし、自ら学ぼうとしていた受講生達は、自分達を高めるために、有意義に時間を活用したいと考えていた。

3) 17名お互いの影響

【刺激し合える仲間】、【起業への決意】、【不安を解消する秘訣】は、お互い知識や経験を尊重しつつ不安がありながらも、第一期生として起業という目標を達成できるように支え合う、仲間意識の高まりがみられていたと考える。受講生の経験や年齢、価値観や個性も多種多様であったが、様々なメンバーが共に学ぶことは、互いのモチベーションを高めるのに効果的だったと考える。すでに在宅看護を経験している受講生は、起業への不安を受講生同士で共有することや対策を提案し、不安を解消できるように支援したいと考えていた。プラス思考の強い受講生達が集まったと考えられる。

しかし、お互いの影響が常に良い関係を保つことは難しい。【距離を置く仲間関係】からは、疲労やストレスも生じており、仲間から距離を置く一面もあり、自分をコントロールしながら関係性を構築していた。

17名お互いの影響として、【安心できる財団のサポート体制】がカテゴリー化されたことに、違和感があるかもしれない。しかし、第一期生にとって、17名の仲間と同じくらい財団に対する思いが、このカテゴリーを生んだと考える。受講開始時、喜多理事長から「第一期生は、同志である」とのお言葉をいただいた。つまり、この研修を一緒に作りあげる熱いメッセージが言い渡された。今までにはない看護と起業がコラボレーションした研修プログラムと各種支援体制を用意した財団に、受講生は信頼と誇りと安心感を得られていたと考える。

勝原ら⁷⁾の研究では、①起業へのイメージは一般看護師もスペシャリストも、「リスクがある」、「難しい」が上位であったが、「可能性を感じる」、「やりがいがある」などが続いた。②起業したいと回答したスペシャリストの目的は、「専門性の発揮」が最も高かった。③起業に必要なことは、一般看護師もスペシャリストも「経営知識」、「資金」、「アドバイザー」を上位に選んでいた。④起業に必要な支援制度としては、一般看護師もスペシャリストも「事業計画や会社設立に関する個別アドバイス」を最上位に選んでいた等を明らかにしていた。

本研究においても、起業に関するリスクや難しさや不安を感じている反面、自分が考える在宅看護の実践すなわち「可能性」や「やりがい」を求め、また、高齢社会

において看護師が地域の健康を生活と医療の両方から支え、「看護の専門性を発揮する」ことを目指し研修受講を意思決定していた。

受講後の意識は起業に必要な講義を受けたことで、【起業資金確保の不安】、【経営者としての重責】、【見えないものに対する恐怖】、【地域連携への不安】など現実的な不安の高まりがあった。講義内容は【満足な講義】、【講義企画者への感謝】、【学習意欲の高まり】という意識の変化がみられ、また、仲間の存在により【起業への決意】、【不安を解消する秘訣】と意識が変化し【安心できる財団のサポート体制】は、起業に必要な支援制度であり、今までにはない看護と起業がコラボレーションした研修プログラムと各種支援体制を用意した財団に、受講生は信頼と誇りと安心感を得られていた。

3. 本研究の限界と課題

本研究は、受講生16名の分析であり、受講生である自分達が分析していること、研修プログラム全てを修了してからの意識ではないため、結果を一般化させるには限界がある。しかし、次年度以降の受講生への支援体制について知見を認めた。今後は、次年度以降の研修の充実と一期生が地域に貢献できているか、実績を調査する必要がある。

Ⅶ. 結論

受講決定の要因には、研修に期待する要因とそれを妨げる要因が抽出された。

研修に期待する要因には、

1. 自分が考える在宅看護を実践し起業すること
2. 財団から各種支援制度があること
3. 高齢社会において看護師が地域の健康を生活と医療の両方から支え、看護の専門性を発揮すること受講を妨げる要因には、

1. 退職しなければ受講できないこと
2. 退職するため収入を得られなくなること
3. 家族の理解が必要なことであった。

受講後の意識には、

1. 起業に対する不安として【起業資金確保の不安】、【経営者としての重責】、【見えないものに対する恐怖】、【地域連携への不安】4つのカテゴリーが抽出された。
2. 講義に対する意見として【満足な講義】、【講義企画者への感謝】、【学習意欲の高まり】、【講義の全体像が見えない不安】、【後期の講義への要望】の5つのカテゴリーが抽出された。
3. 17名お互いの影響として【刺激し合える仲間】、【距離を置く仲間関係】、【起業への決意】、【不安を解消する秘訣】、【安心できる財団のサポート体制】の5つのカテゴリーが抽出された。

謝辞

本研究の実施にあたり、ご協力いただきました受講生、陰で支えてくださいました財団の皆様、そして、この研修の発案者であり、財団の理事長でもある喜多悦子医師に心から感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 内閣府：平成26年版 高齢社会白書（全体版）
http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2014/.../26pdf_index.html 2014. 7. 17
- 2) 厚生労働省：地域包括ケアシステム
http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu/ 2014. 8. 10
- 3) 参議院：議案情報 第186回国会（常会）
http://www_sangiin.go.jp/Japanese/joho/kousei/jgian/186/meisai/m18603189023.htm 2014. 8. 10
- 4) 日本財団：「日本財団在宅看護センター」が目指すもの
http://www.nippon-foundation.or.jp/what/spotlight/home_nursing/overview/index.html 2014. 7. 17
- 5) 勝原裕美子, リポウイツ志村よし子, 田路則子ら. 起業看護師の育成に関する研究：看護者のキャリア選択の多様化にむけて 2006(学会発表の抄録のみ)
- 6) 前掲4)
- 7) 前掲5)

著者への連絡先：石川徳子 〒238-8580 神奈川県横須賀市稲岡町82番地
TEL：046-822-8772 FAX：046-822-8787
E-mail：ishikawa.tokuko@kdu.ac.jp